

エッセイ

## あるひとつの葬儀

松本 三和夫

事業構想大学院大学 教授

「53歳の誕生日を迎えたその日の朝6時30分、彼はチャーチル病院で息をひきとった。『わたしをその山の頂に連れて行って、自由にしてくれ』。それが、最後の言葉であった」。

彼は、マイケル・アリス (Michael V. Aris)。この一節は、オックスフォード大学セントアントニーズカレッジの年次報告に記載されている (Carey 1999)。マイケル・アリスといっても、知る人は少ないであろう。チベット学の碩学である。知と社会の接点にいろいろなかたちがありうることを教えてくれる人間が、じっさいに生きていたことに触れ、新たな知 (例、事業構想学) をめざす人にとっての前提になると思われる事柄につき、ささやかながら、覚え書きを認めたい。

マイケル・アリスは、チベット学でロンドン大学から博士号を得た。博士号を得るまでの間、ブータン王国の王子の家庭教師を長らくつとめる。そして、イギリスに職が見つかり、オックスフォード大学に來た。ポストの少ないチベット学の研究者として、平坦でない人生を歩んだものと思われる。彼に平坦でない人生を余儀なくした事情が、もうひとつある。

彼はミャンマーのスーチーさんの夫として一生を終えた。在ブータン時代に、彼はスーチーさんと出会い、互いに惹かれあう間柄となり、そして結婚する。彼女は、のちにミャンマーの民主化運動に身を投じる運命をたどる。二人は別離を余儀なくされる。あらゆる可能な援助をミャンマーの民主化とスーチーさんに与えた挙げ句、アリスはガンの告知を受ける。最後はロンドンの病院に移されて、そこで死を迎えた。彼が死の床にあったとき、スーチーさんは軍事政権から出国を禁じられており、のちに不承不承許可されたものの、一度国外へ出ると入国が認められることはありえない。それは、民主化にとり打撃となる。彼女は、出国しないことを決意する。当初イギリスで結ばれたカップルは、10年以上にわたる別離のはてに、こうして永遠

の別れを迎えた。

葬儀のとき、わたしはイギリスにいた。アリスがイギリスで育んだふたりの子供は眼を伏せ、時折じっと遠くをみていた。こういう死に方をした父親を悲しんでいたかもしれない。長かった彼の戦いと、母親がいるミャンマーを想ったかもしれない。

生前のアリスと時間を共有した体験に照らしてみると、そういう割の合わない人生をけれんみなく送るタイプの人間は、日本より多いと思われる。そうして、割に合わないなあ、という顔をしてカレッジの中庭を歩いていたりする。個人主義の徹底した国なので、むやみにそういう個人の機微にかかわる事柄に誰も介入したりはしない。まるで知らぬ顔をしている。だが、ほんとうに何か自分の足元を照らす以上のことに人生を賭けてしまうような人はたしかにいて、そしてほんとうはそういう人が眼中にないから知らぬ顔をしているのではないことを、やがては知る機会が来る。公共の場で、そういう人にきちんと発言の機会を与えるとき、それからそういう人が亡くなったときである。それらは、何か人並外れて人の考えないことをきちんと考え、追究した少数の人に公の機会を開き、人びとの記憶にとどめ、次世代に伝える文化システムを目の当たりにするときでもある。

何であろうとも、かつてない新たな地平を切り開くような知の営みというものは、破壊しようと思えば、これほどたやすいものはない。事業構想学を社会のなかで考えると、もしかすると、そういう新たな知をめざす営みのひとつなのかもしれない。新たな知の地平が今日明日に実を結ばないとき、むろん、今日明日の目途を立てることが肝要である。他方、今日明日の目途を立てるにせよ、そのはてに新たな知をめざす営みが実質的に後退しているような社会がすがたをあらわすなら、問題の解決策が別の問題を生んでいる可能性がある。

いずれにせよ、知と社会の境界で、いったいどのように問題が広がっているか、一見して見当もつかないといった

出来事が21世紀におそらく次々と発現するであろう。そして、そうした出来事の解決に役立つことを謳う、さまざまな事業の試みがあらわれることであろう。そのとき、この国は、公に機会を開き、人びとの記憶にとどめ、次世代に伝えるべき価値を体現するものが何であるかを見分ける術が問われると思う。前の世代の残したあらゆることをいま生きる世代の社会が受け取らざるをえないように、結果は、次世代の社会が受け取る価値の豊かさにあらわれることになる。

#### 付記

本稿は、松本三和夫 2001.「社会における知の役割」『科学』71(10): 1320-1327の一部分を新たにまとめなおしたものです。

#### 参考文献

Carey, P. 1999. "Obituaries", St Antony's College Record, 116-118.